



城

第三十一回 石神井城

～身近な公園も実は城跡～

山本 忠博

練馬区にある石神井公園は近隣住民の憩いの場所です。この公園の三宝寺池は、井の頭池、善福寺池とともに武蔵野三大湧水池と呼ばれ、古くから地下水が湧き出ていました。この湧水が石神井川の水源となっています。さて、実は、ここ、城跡なのです。その名を石神井城といいます。今回は、この身近な公園になっている城をご紹介します。

まずは時代背景から

関東の戦国時代と聞くと、多くの方は、まず、北条氏、上杉氏、武田氏の三つ巴の戦いを思い浮かべるでしょう。しかし、今回ご紹介する石神井城が終焉を迎えるのは、それより前の戦国時代初期（1400年代後半）のことです。歴史好きの方でも、興味はたいいてい戦国時代後半に向いていますから、初期のことはあまりご存知ではないでしょう。そこで、すこし長くなりますが、まずは、室町時代から戦国時代初期にいたる関東の状況から説明することにいたします。

室町幕府の関東統治

室町幕府による関東の統治は、足利尊氏が鎌倉府に嫡男の義詮（後の二代将軍）を送り込んだことによって始められます。後に、鎌倉府には義詮の弟の基氏が向かい（1349年）、以降、「関東管領」として関東の統治にあたりました。さらに、この関東管領を補佐する役として当初二名の「関東執事」が当てられ、尊氏の母の実家にあたる上杉氏がその一人に任命されました（後に上杉氏が世襲、独占）。

関東統治の役職名の変化

二代将軍の義詮と初代関東管領の基氏の頃は、南北朝の争乱の真只中で、兄弟は西の京都と東の鎌倉に分れていたとはいえ、互いに協力し合っていました。しかし、時が経

つにつれ東西の足利氏は、次第に対立するようになります。

そして、鎌倉府の足利氏は、関東管領の名を用いず、「鎌倉公方」と僭称するようになります。“公方”とは将軍の別称ととらえてよいので、いかに鎌倉府が京都に対抗心を持っていたかが伺えます。そうすると、非公式とはいえ関東管領の席が空くことになりますから、繰り上げで、上杉氏がその名を僭称することになりました。（現在では、基氏を鎌倉公方の初代、基氏付きの執事を関東管領の初代と数えます。）

関東の争乱

さて、今まで、単に上杉氏と呼んできましたが、実は、上杉氏といっても四つの系統がありました。しかし、争い等を経て残ったのは、上杉氏の本家筋で関東管領の山内上杉氏と、その庶流の扇谷上杉氏でした。

それから、鎌倉公方にも紆余曲折がありました。鎌倉公方が将軍と対立し始めたことは、上で述べたとおりですが、味方のはずの山内上杉氏との仲も次第に険悪となり、終には、基氏から数えて4代目の持氏のときに、山内上杉氏を攻め、かえって幕府の命を受けた山内上杉氏に討たれてしまいます（1439年）。また、持氏の子の5代成氏も、父の敵である山内上杉氏を攻めますが、幕府の介入を招いて幕府側の兵に鎌倉を占拠されてしまい、結果、下総国の古河城（現茨城県古河市）に入って、以降、「古河公方」と呼ばれることとなります（1455年）。

幕府は、古河公方に対抗して、時の将軍の異母兄を鎌倉に東下させますが、幕府の威光にも陰りがみえており、この異母兄も鎌倉に入ることができず、結局、伊豆国の堀越（現静岡県伊豆の国市）に居を構えて、「堀越公方」と呼ばれることとなります（1458年）。

これ以降、関東の諸勢力は、古河公方を中心とする東の勢力と、山内上杉氏、扇谷上杉氏、堀越公方を中心とする西の勢力に分かれて、戦い続けることとなります。



三宝寺池から主郭を臨む



主郭の土塁と空堀

長尾景春の乱と豊島氏

関東の東西の勢力が相争う中で、今度は、山内上杉家の中で反乱が始まります(1476年)。山内上杉家の家宰は長尾一族が持ち回りで勤めていましたが、この家宰の席をめぐる家中の争いが長尾景春の乱に発展したのです。長尾景春が古河公方に通じて、主家に反旗をひるがえしたところ、多くの勢力がこれに同調しました。その中に石神井城の豊島氏がいます。

豊島氏は、平安時代から室町時代にかけて武蔵国の南(現東京都)に勢力を張った武家で、桓武平氏の流れをくむ名族です。ちなみに、その支族に陸奥国の一部(現宮城県北東部)で戦国時代まで勢力を張った葛西氏があり、こちらは伊達政宗と関係があります(葛西大崎一揆)。

名将^{どうかん}太田道灌の活躍と石神井城の落城

長尾景春の乱の際に活躍したのが、後世に名将の誉れ高い太田道灌です。道灌は、扇谷上杉家の家宰でしたから、主家の本家筋にあたる山内上杉氏のために、積極的に乱の鎮圧に尽力しました。

乱の当初、道灌の目前にいたのが豊島氏で、石神井城を

中心として道灌の江戸城を包圍していました。道灌からすると、石神井城の包圍網によって、主家の扇谷上杉氏の居る川越城との連絡を絶たれており、形勢は不利でした。そこで道灌は素早く動きます。

道灌は、石神井城から離れた包圍網の一部を各個撃破し、次いで石神井城の近くの城を攻めて石神井城から豊島氏を誘い出し、これを江古田沼袋原の戦いで大いに破りました。それから、豊島氏を石神井城に追い詰め、城側の偽りの和平交渉を看破して、力攻めで城を落としました(1477年)。豊島氏は、城を落ち延び、しばらく抵抗を試みた末に、没落します。

照姫伝説

史実の上では、豊島氏は、石神井城落城後も落ち延びて、しばらく道灌に抵抗しています。しかし、地元にはこんな伝説も残されています。

石神井城落城の際に、豊島氏の頭首は白馬に家宝の鞍を付けて馬もろとも三宝寺池に身を投げ、それを悲しんだ息女の照姫も、その後を追って池に身を投じました。これを見た道灌は、二人を憐れんで殿塚と姫塚を建てて供養したとのことです。

石神井城址には、実際に殿塚、姫塚と呼ばれるものがあります。また、練馬区では、毎年、ゴールデンウィークの頃に、この照姫をしのんで照姫祭を行っています。

その後の関東

ほとんど一人で乱を鎮めた道灌でしたが、主家の扇谷上杉氏に猜疑の目を向けられて殺されてしまいます。その後、扇谷上杉氏と山内上杉氏は決裂し、更なる争乱となり、この戦いに山内上杉氏が勝利した頃には、関東は、伊豆国(現静岡県伊豆半島)の新興勢力である北条氏の侵攻を受けるようになっていました。最終的に、山内上杉氏は、北条氏に追われて越後国(現新潟県)に逃れ、長尾景虎に関東管領と上杉の名を譲ります。この景虎が後の上杉謙信で、これから、北条氏と上杉氏に甲斐国(現山梨県)の武田氏を加えた三つ巴の戦いが始まります。

石神井城の現在

現在、城の形跡を明確に残すのは、三宝寺池の南に隣接する主郭の土塁と空堀のみです。この土塁等も、保存のためにフェンスに囲まれていて、間近に見ることはできません。しかし、以前の東京文化財ウィークに公開されましたので、今後もチャンスがあるかもしれません。

周囲は、いわずと知れた石神井公園で、水辺観察のための歩道も整備されていて、休日をゆっくり過ごすにはこの上ない場所になっています。